

2013年10月15日



お心肥やし

GNH研究所 代表幹事 平山修一

日本の子供たちは塾に習い事にと本当に大変そうですね。朝も早くから決められた通学路を寄り道もせず（できず）に学校に行く。暇があればゲームにTV、「勉強することがあなたの仕事なんだから」と言われている父兄も多いかと思います。

今の子供はなかなか外で遊ぶ機会がないと思います。積極的に親が関わって子供が身体を使って遊ぶ機会を作ってあげないと、子供が運動不足になりそうですね。子どもの頃に見聞きし、体感した感性は一生の宝物になるでしょう。だからこそ子供の頃に目いっぱい遊ぶことも大事だと思います。

場所は変わってとある南アジアの国。その国は日本と比べると教育程度も低く、外国の援助に頼らないと国が成り立たないほど貧しい国です。その国が東日本大地震の被災者追悼のため国を挙げて喪に服しました。

その事は日本のマスコミにも取り上げられることもなく、粛々と行われました。国の代表者をはじめ、一般の国民の多くも犠牲者に祈りを捧げました。こうした気持ちは経済的に豊かかどうかという事はさておき、人として立派な行為だと思います。

江戸時代の日本では「お心肥やし」といって学問より心を肥やす（育てる）訓練を子供たちにしたそうです。江戸時代といえば寺子屋制度。身分の隔てなく識字教育が行われたことが注目されますが、それだけではなく、礼儀や道理、人としてどうあるべきかを教える事も寺子屋の重要な役割でした。

また江戸では子どもは寺子屋の帰りは寄り道してお寺で遊んだり、川や森で遊んだり寄り道をして、自分の住む場所を五感で感じていったのです。こうして子供たちは自分のペースで心の中にひとつの核になるものを育てていったのでしょうか。

子供が遊んでいると、つい勉強しなさいと言いがちですが、勉強だけできる人を育てていいのかとも思います。よく考えれば自分だって子供の頃、何時間も勉強するのは辛かったと思います。

「勉強大変だね…」素直にその気持ちを子供に伝えることが子供の心を育てる行為かもしれません。心が育たないと幸福を感じられない不幸せな子供になってしまうそうです。それこそ人として一番大事な行為では、とったりしています。

コラム① 「幸福」への学びと実践の場、

Act for Happinessの活動紹介

堀遼一

●Act for Happinessとは

「幸せって何だろう。」

「どうすれば幸せになれるのだろう。」

誰もが人生の中で必ず考えるこの疑問。ただ、それを真剣に考えたり、話し合ったり、幸せになるために行動するという事はなかなかありません。

この誰もが抱く素朴な疑問に対して、真正面から向き合いたい。そして、物質的な価値が重視される現代の世の中で、精神的な豊かさを追究することの大切さを訴えていきたい。このような思いで、Act for Happiness (通称AFH) は2012年5月に生まれました。

以後、様々な有識者からの講演や、小さな実践活動を毎月定期的で開催し、2013年3月には

「HAPPY DAY TOKYO」のイベントにも参加し、AFHの活動理念に多くの方が共感してくださいました。

そして、先日はGNH研究所と共催でブータン元首相フェローの高橋孝郎さんのご講演を開催させていただき、直前の募集だったにもかかわらず、多くの方にご出席頂きました。

現在は定期的な活動はしておらず、「プロジェクト」単位で単発的にイベントを企画し、その都度参加者を募集するという形式で、細く長く活動しています。

●「幸せ」の定義

このようなAct for Happinessの活動に対して、疑問を持つ方も少なくありません。

その一つは、「「幸せ」は人それぞれなのだから、考えても答えなんて出ないだろう」ということ。

この疑問に対して、確かに一面その通りだと思います。何がその人にとっての幸せなのか、それ

は人それぞれです。サッカーが大好きな人にとってはサッカーをすることで幸せを感じることは容易ですが、サッカーが嫌いな人にとってはサッカーをして幸せを感じることは難しいでしょう。

それ故に、AFHは自分自身の幸福感に向き合うということを尊重しています。何をするときにも最も幸せを感じるかということについて、私たちは案外知らないものです。一人一人が自分にとっての「幸せ」に気づき、向かい合い、今の人生を見つめ直すことが、幸せに生きるための第一歩だと思います。

また、「幸せは人それぞれ」と言いましたが、同じ人間の抱く感情としててんでバラバラということはないでしょう。実際、多くの幸福についての科学的な研究において、何が人を幸せにするのか、ということに対して共通した見解がありません。

例えば、「感謝」。毎日の当たり前に思われる生活が、実は有難いものであったと気付いた時、今生きている自分が如何に幸せかということを知ります。

もちろん、ただ単純に「ありがとう」という回数を増やせば良いと言うわけではありませんが、感謝の気持ちが幸福感に繋がっているというのは研究結果を待たずとも実感できるものでしょう。



AFHの活動の様子

AFHの活動は、このように「幸せ」を無理に定義することなく、むしろそれぞれの価値観を尊重しつつ、「感謝」といういわば「幸せの本質」を探究し、それを如何に私たちの生活に浸透させていくことができるかを考え、実践しています。

●「幸せ」の実践

AFHの活動はその団体名の通り、実践(act)をすることに主眼を置いています。広い意味では勉強会や研究も実践のうちですが、何が人を幸せにするのか、どうすれば人は幸せになれるのか、ということから自らの実践を通して感じ、社会に広めて行きたいと私たちは考えています。

例えば、先ほどの「感謝」に対する実践として、「HAPPY DAY TOKYO」では「ありがとうの手紙を大切な人に送ろう！」というイベントを企画しました。手製のはがきとポストを用意し、来場者に感謝のメッセージを書いて投函してもらおうという非常にシンプルなもの。普段「ありがとう」なんて気恥ずかしくて言えないという人には効果きめん！遠く離れたおじいちゃん、おばあ

HAPPY DAY TOKYO の様子



堀 遼一 (ほりりょういち)

GNH研究所 会員

1986年横須賀生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、公益財団法人松下政経塾に入塾。2年半の研修の間にAct for Happinessを仲間と共に設立。現在、アクセンチュア株式会社にて勤務する傍ら、誰もが幸せに暮らせる社会を目指して活動中。

ちゃんに送りたいという子ども、お互いに向けて送りたいと二人で書き合っていたカップル、いつも温かいご飯を作ってくれる母親に感謝したいと言う青年——、

たくさんの「ありがとう」がポストに入れられました。

小さな取組みではありますが、「感謝」の大切さを多くの人に届けることができました。また、この活動を通して私たち自身がハッピーになれたことは言うまでもありません。

将来的にはより多くの人に、「幸せの本質」を伝えていく活動ができればと考えています。

●GNHという「幸せ」の定義と実践

このように、AFHは幸せとは何かを学びつつ、どうすれば多くの人が幸せになれるのかを追究しています。

そんな私たちにとってGNHという理念(指標)は、長い時間をかけて探究すべきテーマであると考えています。GNHは元々理念として存在していましたが、それを指標化するということは必然的に「定義付け」が必要になりますし、それをどう国民に浸透させていくかという「実践」が不可欠です。ブータンはどのようにしてこの難題を克服していくのか。そしてブータンにとどまらず、日本が、世界がGNHを実践していくとしたら、どのような課題があるだろうか。関心は尽きません。

途上国だろうと先進国だろうと、昔だろうと現在だろうと、「人」は「人」であり続け、そして「幸せ」は「幸せ」であり続けると思います。

物質的に飽和し、少子高齢化・人口減少社会に突入している日本が次の繁栄に心の豊かさ、精神的な充足を見るならば、GNHの存在を見逃すべきではないと思います。

AFHは新しい日本、世界の礎の一つとなれるようにこれからも活動していきます。GNH研究所の皆様とこれからも様々な場面で協力して活動していければ幸いです。

コラム② 情報と幸福の甘くて苦い関係

藤原整

「ブータンの情報化」をテーマに研究をしている、という話をすると、まず「どうしてそんな研究を？」という怪訝な顔をされることが多い。

「幸福の国」として語られることの多いブータンと、「情報」という現代社会を象徴するような言葉とが、上手く結びつかないのだろう。

たしかに、ブータンは近代化、特に先端技術を導入することに対して、最大限の注意を払ってきた。自然環境への負荷、伝統文化への浸食を最小限に抑えることが出来なければ、経済的メリットを得られたとしても、結局は国民の幸福には繋がらない、との考えからであった。当然、情報化を進める上でも、慎重な政策が採られてきた。かつて第4代国王は、「欲望は人間が受け取る情報量と比例して増大する」と語ったと言われており、情報化による影響力、例えば、欲望を刺激され、過度の消費主義に走ってしまうことなどに、強い警戒感を抱いていたことが伺える。

それでもなお、ブータンが国家政策として情報化を推し進めなければならなかった背景事情には、時を同じくして進行していた民主化への歩みが大きく影響していると考えるのが妥当である。情報が広く国民に開かれていることは、国民が、自らの良識に基づいた正しい判断を下す民主国家にとっての必須条件であったためだ。

このような経緯を経てブータン国民に与えられた「情報」は、果たして彼らを「幸福」に導いているのだろうか。学問的には、その問いに答えることは極めて難しい。「情報」と「幸福」のあいだには、多くの間接的要因が折り重なっており、その直接の因果関係を特定することはほぼ不可能であるからだ。

新しい「情報」、例えば、隣国での生活の様子などに触れることによって初めて、自分たちの生活が相対化され、あちらに比べてこちらは貧しい、といった状況を認知することになる。そのとき、人々の心に生まれるのは、憧憬や羨望だろうか。そうしたプラスの感情が、ある種の原動力と

なって能動的に変わろうとするならば、ブータンの情報化はきっと国民を幸福へと導いていくだろう。しかし、嫉妬や諦観に支配され、ネガティブな思考に囚われてしまえば、その未来は決して明るくない。「情報」そのものが善であったり悪であったりすることはなく、全てはそれを受け取る人間の心一つ、ということになる。

さて、最後に一つ。1960年代からはじまる、高度経済成長時代の日本。その中に、工業化の次を見据え、技術革新によってもたらされる近未来社会としての情報化社会を夢想した先達がいた。その中の一人、増田米二は、情報社会では、コンピュータが人間の知的労働を代替・増幅する、という技術革新が、社会・経済構造だけではなく、人々の価値観をも大きく変革することを予測した。その一方で、彼の著書の中には、情報社会の国民目標は「国民総充足 (Gross National Satisfaction)」である、という文言が出てくる。当時の日本で、ブータンの「GNH」を紹介した文献等は皆無であり、増田が、「GNH」という言葉を知っていた可能性は限りなく低い。それでもなお、彼の提唱した「GNS」は「GNH」と驚くべき近似を示している。この偉大な先達は、「情報」に満ち足りた未来(≒「幸福」な未来)を託したのだ。



藤原 整 (ふじわら ひとし)

GNH研究所 研究員

コナミ(株)退職後、早稲田大学大学院に進学。研究テーマは「ブータンの情報化」。大学の震災復興支援の一環で、宮城県気仙沼市にてまちづくりに従事。日本ブータン友好協会 幹事。個性派ライターコラム JunkStage 代表理事。

GNH勉強会（第1回～第6回）報告

文責 平山雄大（GNH研究所 東京事務局）

ブータンにおけるGNHの最近の動向を学ぶことを主目的に、GNH研究所のプロジェクト（分科会）として、2013年4月より毎月1回「ブータン勉強会」を開催しています。1年間＝全12回の開催を予定しておりますが、今回、前半となる第6回までが終わりましたので、ここに報告をさせていただきます。

●第1回GNH勉強会

日時：2013年4月13日（土） 14:00～16:00

場所：早稲田大学 16号館606教室

発表題目・発表者：「GNHの開発政策への適用」平山雄大

●第2回GNH勉強会

日時：2013年5月11日（土） 10:00～12:00

場所：早稲田大学 16号館606教室

発表題目・発表者：「GNHの指標化」平山雄大

●第3回GNH勉強会

日時：2013年6月8日（土） 10:00～12:00

場所：早稲田大学 16号館606教室

発表題目・発表者：「GNHの世界への発信」平山雄大

上記の3回の勉強会は、2013年3月に開催されたGNH研究所東京定例会合での平山の講演「徹底検証GNHの誕生と広がり」（ニュースレター第5号を参照）の続編として、「GNHの考えは、どのような段階を経て国家開発目標に組み込まれたのか?」、「GNHの4本の柱」はいつ誕生し、どのような変遷を遂げたのか?、「国民の97%が幸せ」の根拠は?、「なぜGNHを指標化する必要があったのか?」といった問いに回答を導き出すかたちで発表及び議論を行いました。第3回勉強会では、GNHの概念がブータンから世界へどのように発信されているのかを、国連幸福決議、幸福に関するハイレベル会合、国連持続可能な開発会議（リオ+20）採択宣言、GNH国際ワーキンググループの活動等最新の動向から理解すると同時に、講演+全3回の勉強会の総まとめを行いました。

●第4回GNH勉強会

日時：2013年7月14日（日） 10:00～12:00

場所：早稲田大学 11号館504教室

発表題目・発表者：「GNHとGNH教育—ブータンにおける新たな教育の展開とその限界—（前編）」平山雄大

近年、ブータン内外で話題になっているGNH教育（Educating for Gross National Happiness）を理解する前段階として、ブータンの近代学校教育史を紐解きました。ブータンにおける近代学校教育の定義と特徴、時期区分を再検討するとともに、第1次5ヵ年計画（1961年）開始以前の教育事情を明らかにしました。（第7回以降の勉強会にて続編を開催し、現在の学校現場におけるGNH教育に迫りたいと考えています。）

●第5回GNH勉強会

日時：2013年8月10日（土） 12:45～14:45

場所：ブータン日本語学校（於：ティンブー）

発表題目・発表者：「ブータン社会とブータン人の思考の変容—在ティンブー15年を通して—」青木薫

初のティンブー開催となった第5回勉強会は、GNH研究所研究員でティンブー在住の青木薫さんに発表をしていただきました。7月13日の第2回国民議会選挙により新与党となった人民民主党（PDP）の「100日公約」をもとに、国民が今求めているものを分析しブータンの変化を考察しようという試みは斬新で、現地での経験をもとにされたお話を伺うことができたという点も含め、非常に有意義な勉強会となりました。

●第6回GNH勉強会

日時：2013年9月21日（土） 10:00～12:00

場所：早稲田大学 4号館202教室

発表題目・発表者：「徹底検証 第4代国王の演説・発言」平山雄大

GNHという言葉の提唱者である第4代国王の考えを、国民に対する演説及び新聞・雑誌インタビュー等における発言を通して理解するという試みを行いました。その結果、ブータン国内における演説の中で第4代国王はGNH（及びそれに相当するゾンカ）という言葉は一度も用いておらず、一貫して重要性を指摘しているのは、「経済的自立の達成」及び「政府と国民が協働すること」であることが明らかになりました。

今後のGNH勉強会に関しては、詳細確定次第、GNH研究所メーリングリスト、ウェブサイト等を通してご案内させていただきます。引き続き、どうぞよろしくお願いたします。



東京定例会合の様子

東京定例会合報告 2013年9月7日開催

文責 齊藤光弘 (GNH研究所 東京事務局)

●会合概要

- ・日時 2013年9月7日 (土) 10:00~13:00
- ・場所 早稲田大学 12号館 301教室

●内容

ブータン王国2代目フェロー、高橋孝郎さん(現世界銀行グループ 国際金融公社 勤務)をお招きし、当研究所主催・Act for Happiness共催で、40名を超える方々にご参加いただいて、講演会を開催しました。テーマは「ブータンから考える『お金』と『しあわせ』の関係」。高橋さんの新著『ブータンで本当の幸せについて考えてみました「足るを知る」と経済成長は両立するのだろうか?』(本林靖久さんとの共著)の出版記念講演です。当日は、高橋さんから講演を頂いた後に、Q&Aを挟み、ワールドカフェ形式のワークショップも開催し、参加者それぞれが思索を深める時間を持ちました。

高橋さんのお話では、GNHの基本的なコンセプトの説明から始まり、貧富の格差の拡大や雇用不足など経済的な観点でブータン王国が抱える課題についてご紹介いただきました。ブータンでは、住宅・建設ローンや消費者ローン、自動車のクレジットローンの貸出額が急速に増加し、バブル的な様相を示しながら消費意欲が高まり続けています。背景には、金融リテラシー教育が遅れているため、安易な借入が行われているという状況も発生しているそうです。高橋さんが在任中に取り組みされた、ドラマ仕立てによる金融リテラシー教育コンテンツの整備や、マイクロファイナンスの仕組み化など、現場感溢れる貴重なお話を頂戴しました。

高橋さんのお話で興味深かったのは、高橋さんがブータンの僧侶から伺った、「お金は重要だが、お

金の奴隷になっていけない」という言葉です。お金は、その稼ぎ方(働き方)や使い方も含めて、人間が生きる上での価値観が表れているものともいえます。日本人は、いつの間にかお金を稼ぐことが目的化してしまい、そのプロセスや、お金をどう使うか?ということに対する、自分なりの軸が見えにくくなっているのかなとも感じました。

高橋さんのご講演の後、ワールドカフェという参加者が4~5名ずつ分かれて行うファシリテーションの手法を用い、参加者みんなで対話の時間を持ちました。主催者側で準備したテーマは、①高橋さんのお話を伺って、どんなことを感じましたか? ②幸福感とお金の関係を、あなた個人はどの様に考えますか? ③あなたが日本の首相としてGNHを目指した国づくりをするとしたら、お金、経済のことをどのように位置づけますか? と、感想の共有から始まり、個人として、そして視座を一段引き上げて、リーダーとしてお金や経済成長をどう捉えるかということ、話し合いました。

ご参加いただいた方のお一人は、お金を使うことを“消費”ではなく“投資”と考えながら生活しているそうです。自分が気に入った商品にお金を払い、その会社がますます世の中に良い価値を提供してくれる様に見守る。お金にはそんな機能もあるかも知れません。お金と主体的に向き合うとても大切な視点だと感じました。

日本では少子化・高齢化が進み、過去の様な高い経済成長は望めないと言われていています。その様な前提の中で、高橋さんのご講演は、過去の延長線上ではなく、今後、日本人が目指すべき経済のあり方や、消費のあり方を参加者一人ひとりが考える、とても有意義な時間となりました。

掲示板

● 第2回ブータンシンポジウム (日本ブータン友好協会主催) 開催決定!

昨年、「変わるブータン、変わらぬブータン -GNHへの挑戦」と題した、第1回シンポジウムが開催されました。今年は、ブータンにおいて2度目の総選挙が実施され、政権交代が果たされるという、大きな節目の年となりました。今回は、「ブータン、民主化への挑戦 -2013年総選挙までの道のりとこれから」というテーマを掲げ、ブータンの民主化へ至る歩みを振り返るとともに、この先、ブータンが真の民主国家を目指していく、その行く末を展望します。

日時：2013年12月15日 (日) 13:00 本会議開場

会場：JICA地球ひろば 2階 国際会議場 (JICA市ヶ谷ビル / 〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5)

定員：130人 (先着順)

会費：本会議 日・ブ協会会員,学生1,000円 / 一般1,500円 (当日2,000円)、懇親会 日・ブ協会会員,学生4,000円 / 一般5,000円 (当日5,500円)

登壇者・発表者、お申込方法、および、その他詳細については、日本ブータン友好協会ホームページ内特設サイトをご確認下さい。

URL：<http://www.bazam.net/jbfa/symposium/>

● GNH研究所 公式Facebookページ開設 (再掲)

このたび、GNH研究所では、積極的な情報発信や新たな会員の獲得を目的として、公式Facebookページを立ち上げました。Facebookのアカウントをお持ちの方は、ぜひアクセスしてみてください。

URL：<https://www.facebook.com/GNH.study>

編集後記

● 去る7月にブータンで実施された総選挙の結果、前野党が勝利を収めました。党首であるツェリン・トブゲ氏が首相に就任しましたが、これまでGNH政策を積極的に推し進めてきたジグミ・ティンレイ前首相から交代したことで、今後、ブータンのGNHがどのように変化していくのか、注目しています。(藤原整)



GNH研究所 ニュースレター 第7号

発行元 GNH研究所 (代表幹事：平山修一)

<http://www.gnh-study.com/>

発行日 2013年10月15日

編集者 高田忠典 (GNH研究所 研究員)、藤原整 (GNH研究所 研究員)

著者 平山修一 (p.1)、堀遼一 (p.2,3)、藤原整 (p.4)、平山雄大 (p.5)、斉藤光弘 (p.6)

写真 関健作 (p.1,7)、堀遼一 (p.2,3)、藤原整 (p.4)、斉藤光弘 (p.6)

※全ての著作物および写真の著作権は、上記の方々に帰属しています。